



「泣く子ども」の助け手

—マドレーヌ・グタールの手紙から—

津守 真

今年のはじめ、OMEPE元世界総裁、マドレーヌ・グタールさんから、新年のご挨拶と一緒に、ニコラ・ベルナル・レピシエの描いた「泣いている子ども」と題する絵葉書を頂いた。十八世紀の貧しい服装の少年が樽の上に腰掛けて右手にもった布で眼を拭いている絵である。絵葉書の裏に、「泣く子どもの助け手」として私の名前が記され、「倉橋惣三の感動的な詩の引用に誘われて、私はこの絵を同封します。いろ



いろいろな種類の困難を経験している子どもたちの教育者として、あなたはあなたの人生の中で多くの『泣く子どもたち』を助けて来られました。」という手紙が添えられていた。年末に各国のOME Pに出した季節の挨拶状に、私は倉橋惣三「育ての心」の中の『廊下で』という有名な詩「泣いている子がいる。……」を英訳して引用したのだった。光栄な賛辞であるが、それ以上に、これは日本の保育者すべてに対する励ましの言葉であると私は思った。私は外国で講演したとき、倉橋惣三の教育詩を引用して話すと、皆が耳を傾けてくれることを何度も経験した。スペインでも、ブルガリアでも、南米コロンビアでもそうだった。どこの国でも、保育者は泣いている子どもがいると、何はおいても手を伸ばさずにはいられない。これは万国共通の人間感情である。子どもの保育を通して世界はひとつである。マドレーヌ・グタールはそのことを認識し、日本の幼児教育の歴史に「育ての心」があることを日本の保育者は誇りとし、世界の保育者に語りかけてくれるようにと、激励のエールを送られたのだと思う。

マドレーヌ・グタールは、全日私幼の招きによって何度も来日された。一九九五年には、横浜で行われた第二十一回OME P世界大会で、「寛容のための教育―国際寛容年に際して」と題する講演をなされたことを記憶される方は多いだろう。その講演



で、寛容という語は、現代の世界において増大している憂慮すべき不寛容と対立させることによつて、意味が一層明瞭になることをまず述べられた。「今日に生きる人々は、不寛容が暴力的な行為として現れたときに非

難の声を上げますが、同時に、伝統的な価値観が失われ、風紀が乱れ、社会や教育現場に自由放任主義が広まることを嘆く姿も見受けられます」。彼女は、それでは寛容の限界はどこまであるかを問う。他者を尊重するとは何でも大目に見る寛大さではなく、「その人について肯定的な見方をするにより、信頼感を抱き、——ときには公の非難にさらされるような芳しくない振るまいがみられようとも、その人を受容すること」であると言う（OME P第二十一回世界大会報告書「いま、人間を育てる



nicolas bernard Lépicic (1735–1784)



「子ども時代の充実に向けて」一一五―一二三頁)。しかし、それは実際に非常に難しい。だれでも人道主義的な演説ではそれを説いても、日常の行動でそれをするとは困難である。「他人に我慢させていることよりも自分が我慢していることの方が強く意識されるわけですから、自分が実際よりも寛容の精神にあふれていると思ひ込むのが一般的な傾向です」。人が自分自身の限界を越える手助けをしてくれるのは、自分とは異質な存在(他民族、異文化、障碍など)と出会うことである。ワロンのもとで学んだ彼女の視野は哲学的、社会学的である。

グタールは最後に、同じフランス人のロベール・ギランが日本人について、「自我は弱い、その見事な代償として、我々が強く、——この社会は謙虚さと連帯感をもつ」ことを引用し、この社会こそ「寛容のための教育」を推進できるであろうと述べる。このことを述べてきて、私はマドレーヌ・グタールの講演の結びを引用しないわけにはいかない。「まもなく、広島と長崎に原爆が投下されてから五十年目の記念日を迎えます。この地球は、また、新たな脅威にさらされているようですが、私たち OMEP のメンバーが、こうしてここに集まったことは、将来への希望と励ましの印といえましょう。なぜなら、OMEP という組織は、存在そのものからしても、その規約や目標によっても、それ自体が寛容と平和の学校だからなのです」。

このことを引き継いで私が言葉を足すならば、日本人には確かに寛容の素質があ



る。しかし、それはとかく内輪の者同志に限られる。ひとたび異質な者と出会うとそれを排斥する度の強いことは、これまでの私共の歴史に明らかである。日本の社会と学校の問題は異質なものを排除して、内輪の同質さを守ろうとするところにある。それは最も不寛容な態度につながる。排除された体験がエスカレートすると、反社会的になる。現代の日本には、顔は笑っていても、手にナイフを持っていても、心は泣いている子どもが満ちている。その子どもたちを含みこんでの学校であり社会である。

寛容は個人の倫理でもあるが、それ以上に共同体の倫理である。
保育者は泣く子どもの助け手である。